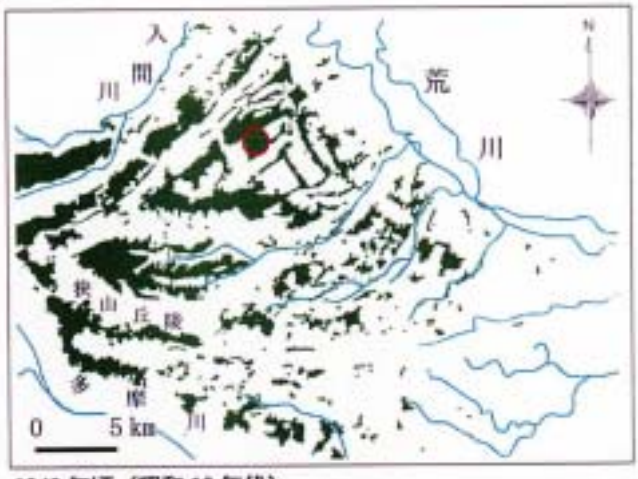
第2節 くぬぎ山地区の歴史

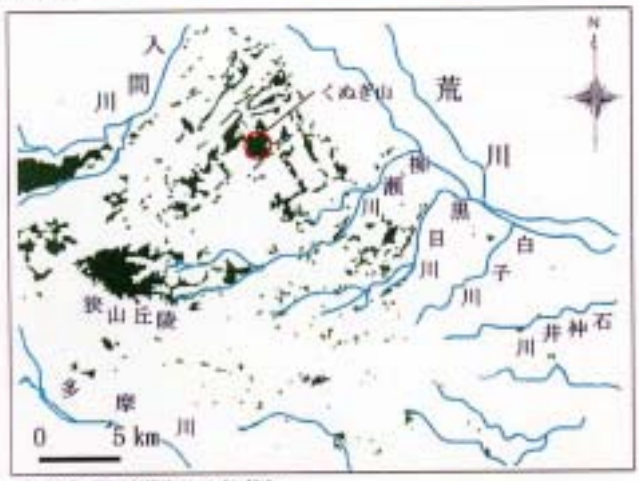
1.武蔵野台地の樹林分布の変遷

くぬぎ山地区は、入間川、荒川、多摩川に挟まれた武蔵野台地上の平地林である。図に示すように、明治期以降、武蔵野台地上の平地林は減少を続けており、特に近年の減少は著しい。こうしたなか、くぬぎ山地区周辺は一団の平地林が残る重要な地域となっている。

1880年頃（明治20年代）



1940年頃（昭和10年代）



1970年頃（昭和40年代）

図 武蔵野台地上の平地林の変化
(犬井、1992を改変)

2.くぬぎ山地区の歴史

(1) くぬぎ山地区の成り立ちなど

くぬぎ山地区は 17 世紀末から 18 世紀初頭の新田開発に伴い、植林によって形成されたと考えられる。新田開発による短冊型の地割りとは異なる一団の樹林地である理由については確実なことはわかっていない。

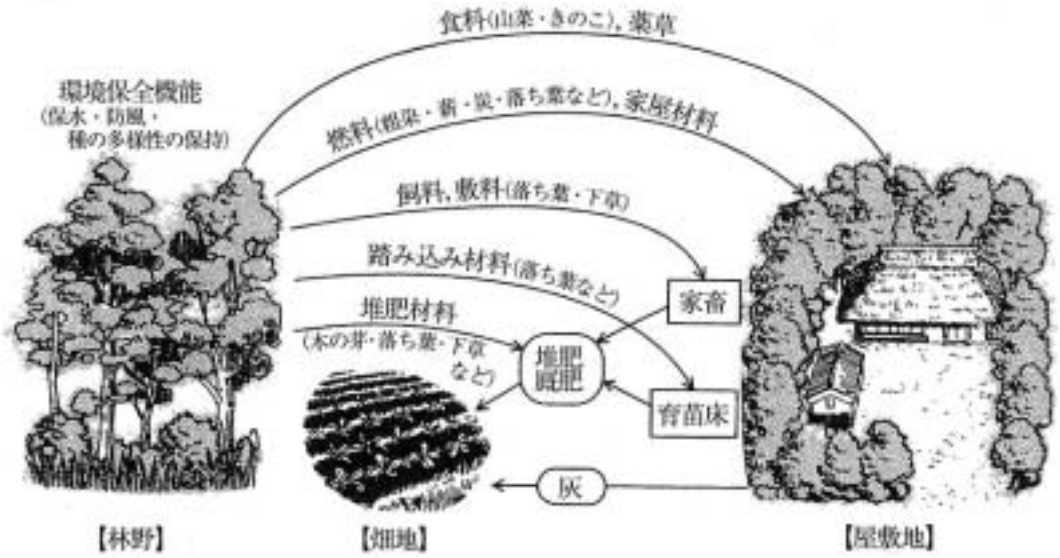
かつてのくぬぎ山地区の様子を知ることのできる最も古い地形図としては、明治 14 年測量の2万分の1フランス式彩色地図がある。そこには、くぬぎ山地区は、ナラ林と雑樹林(様々な樹木が混ざって生えている林)であること示されている。その後の、明治 43 年の地形図には針葉樹(アカマツと考えられる)の記号のみが、大正15年、昭和35年の地形図には、広葉樹と針葉樹の両方の記号が記されている。これらの地図や現在の植生、地元の方の話などを総合すると、明治以降のくぬぎ山地区は、落葉広葉樹を主体とした雑木林だけではなく、アカマツ林が相当面積を占めており、その割合は時代によって変化してきたと考えられる。これは、くぬぎ山地区が新田開発の短冊型地割りの雑木林のような農用林・薪炭林として活用されてきたことによるものと考えられる。

図　明治前期(明治 14 年)のくぬぎ山周辺の状況

出典:明治前期測量2万分の1フランス式彩色地図((財)日本地図センター)

(2) 伝統的な平地林の利用と管理

新田開発によってつくられた平地林は、堆肥の原料となる落ち葉や燃料となる薪や粗朶(そだ)、建築材の供給源などとして、農業や農家の生活を維持するために活用、管理されてきた。



平地林の利用 (犬井、1996)

●平地林の管理方法

○カヤ刈り

冬至を過ぎるとヤマに入りススキやチガヤなどを刈り取る。カヤは、かつては屋根葺き材料として用いられていたが、トタンなどの普及でカヤを刈る姿も見られなくなった。カヤは平地林伐採後3年程度のものが最良とされた。

○間伐・バヤ刈り (下刈り作業)

カヤ刈りが終わると、落ち葉をかき集めやすいように、林の手入れと林床の整理を行う。まず枯れ枝を落とし、立ち枯れた木を切り倒す。樹木の密なところは、間引きのための間伐を行う。それが終わると「なた鎌」で林床の低木類や、草木類を刈り払うバヤ刈りを行う。

○落ち葉の採取 (クズ掃き・ヤマ掃き)

熊手で落ち葉をかき集め、大きな竹籠 (六本バサミ、八本バサミと呼ぶ) に詰め込む。

○萌芽更新作業

落ち葉の採取が終わると、伐期になった林を伐る。木を伐る時期は、林地の地形や土壌などによって異なるが、15～20 年の周期が一般的であった。木を伐る時期は、樹木の休眠期に当たる、11 月から翌年の2月下旬頃までである。

(3) くぬぎ山地区の開発

1955 年頃のくぬぎ山地区は、南部にわずかな農地がある以外は、ほぼ全域が樹林であった。1970 年頃の高度経済成長期には、武蔵野台地で開発により多くの平地林が消失したが、くぬぎ山地区においては、一部がグラウンド造成のために伐採された以外には、ほとんど開発は行われなかった。なお、1970 年には新都市計画法施行にともない、くぬぎ山地区一帯は、市街化調整区域に指定されている。

1980 年頃にも大きな変化はないが、その後、資材･残土置場や倉庫･工場などが急激に増加し、1995 年頃には、これらが虫食い状に分布している。

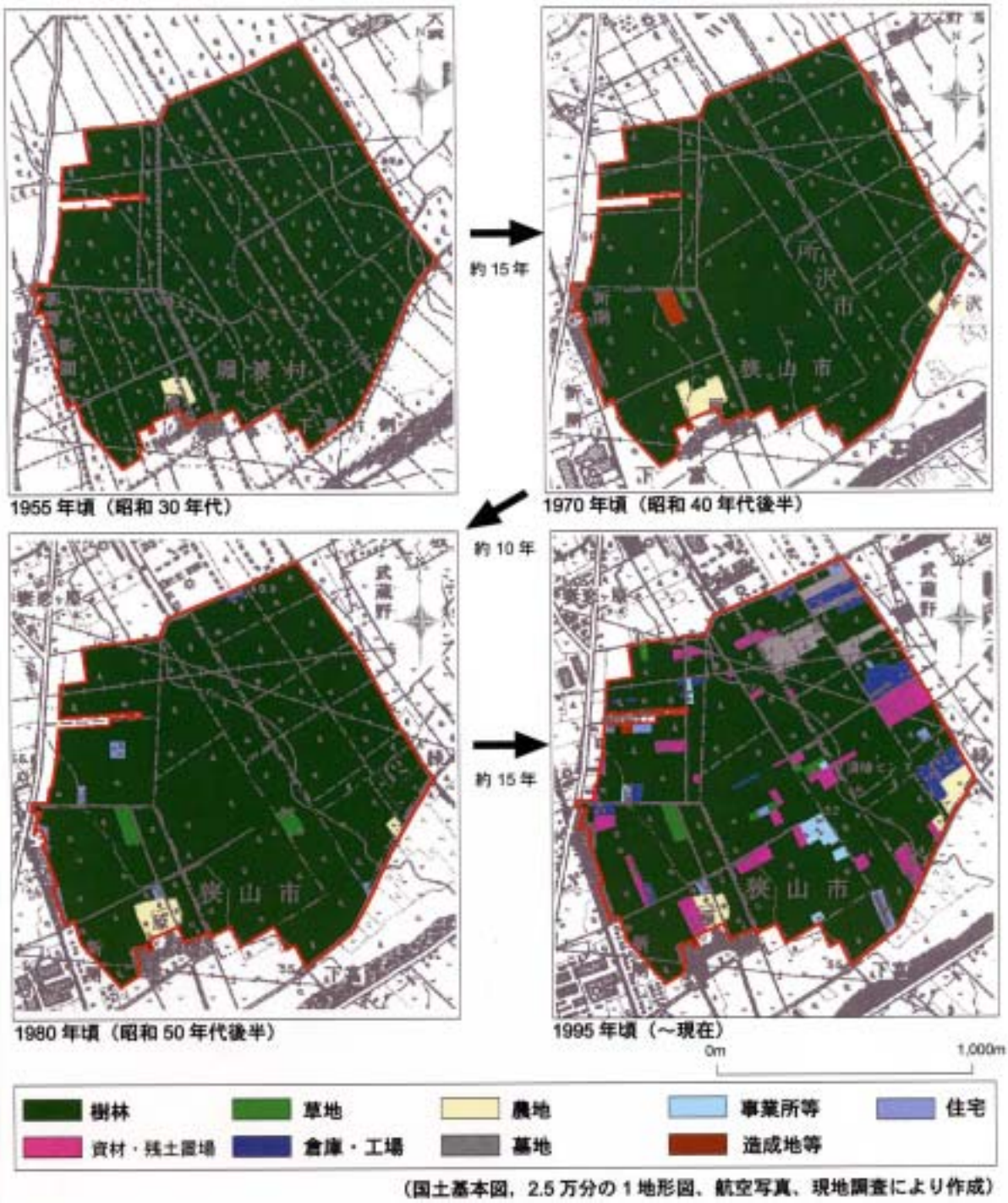


図 くぬぎ山地区の土地利用の変遷